

## 新潟のメディカルビットバレー、高度医療機器を地域共有

2024/5/28 5:00 | 日本経済新聞 電子版



エールホームクリニック長岡が保有しているX線CT装置。CT検査に熟練した診療放射線技師が撮影を担当する

医療法人メディカルビットバレー（新潟県長岡市）は、自社の医療機器を他の医療機関と共有する取り組みを始めた。利用契約を結んだ医療機関の患者は、空いた時間にメディカルビットバレーのCT装置を利用できる。撮影した画像は同社が連携する大阪大学が遠隔で読影する。高度医療機器と専門性の高い画像診断を地域で共有できる体制を整える。

メディカルビットバレーが運営する複合クリニック「エールホームクリニック長岡」（同）が保有するX線CT装置1台とX線骨密度装置1台の共同利用を開始した。利用を希望するクリニックは、同社と医療機器の共同利用委託契約が必要。内科や脳神経科、婦人科など幅広い診療科からの利用を見込む。

利用するクリニック側は、検査予約表に患者情報や検査日時などを記載し患者に渡す。検査当日、患者は予約票と保険証を持ちエールホームクリニック長岡を訪問する。エールホームクリニック長岡の診療放射線技師が撮影を担当する。

撮影したデータはクラウド経由で大阪大学放射線総合医学講座の専門医と共有し、遠隔で画像を読影してもらう。その後、検査画像や画像診断レポートを依頼元のクリニックに送付し患者の診療に生かしてもらう。最短で検査の3営業日後を目安に発送するが、すぐに必要な場合は相談に応じる。装置の利用には1回ごとに診療報酬が発生する。



メディカルビットバレーが運営する大型複合クリニック「エールホームクリニック長岡」（新潟県長岡市）

医師不足や経営難など地域医療の環境は厳しさを増している。導入費用が高額なCT装置を備えていない小規模クリニックは多い。これまではCT装置のある大きな大学病院に患者が集中し、長い待ち時間や病院側の業務負担の増大が課題になっていた。

メディカルビットバレーのエールホームクリニックは、大学病院と小規模クリニックの中間に位置する「大型複合クリニック」で、病院並みの医療設備をそろえている。渋谷裕之理事長は「地域で共同利用できればクリニックと患者、大学病院それぞれに利点がある」と話す。

連携する阪大放射線総合医学講座の富山憲幸教授は「CTは脳出血や腸閉塞などの発見や、がんの早期発見にも有用」と指摘。CT検査を受ける機会の増加は、地域医療改善の観点からも重要とみる。

高度医療機器を地域内で共有するだけでなく、画像診断で県外の大学と連携する取り組みは全国でも珍しいという。メディカルビットバレーは医師少数県の新潟で地方のクリニックと大学病院をつなげる役割も担い、地域医療の質向上を図る。

（斉藤美保）